

1 ホワイト・ヘブン・サナトリウムと ローレンス・F・フリック医師

青木 國雄

米国ペンシルベニア州のホワイト・ヘブン・サナトリウムは、貧困な結核患者のために造られ、トルード・サナトリウムと共に、二〇世紀前半の米国の結核医療を支えた中心の一つであった。しかし日本では全く知られていなかった。演者はペンシルベニア大学でこの事実を知り、大きな感銘を受けたので、この療養所と創設者について紹介する。なお米国の結核死亡率は一八七〇年に入り減少し始めたが、罹患者はなお増加を続け、特に経済的に貧しい移民の間に患者は多く、結核救済活動が始められていた。

フリック医師の活動

フリックは聖職を志したが、結核に罹患したため断念し、医学に転じた。一八七九年ジェファソン医科大学

(フィラデルフィア市)を二十三歳で卒業したが、結核が再発し、米国各地で転地療養をした。一八八三年、彼はフィラデルフィア市内中心部のパイン街で結核専門の診療所、特に貧困結核患者を対象に診療を始めた。貧困者に転地や入院療養は不可能であり、居住地で治療と予防を考えた。彼は患者に治療や看護の方法を教えると共に、低栄養に対して牛乳などを無料で与え、清潔を守らせた。やがて彼はローベルト・コッホの結核菌発見を知り、結核対策は感染予防が第一と考えた。感染説を否定する医師が多かった時代である。フィラデルフィア市の聖・ジョセフ教会のジョン・サカリー尊師は仲間と共に貧しい結核患者の救済にあたっていたので、フリックも参画、やがてその対策の指導者となった。そして感染予防のため、重症患者を病院に送り費用を負担するという対策をたて、一八九五年二月二十一日から始め、一九〇〇年までの五年間で三八一人の患者を入院させ、その費用一八、六二八・二ドルを募金で支払った。やがて自らの療養所を建て、患者を收容しようと企画した。幸い募金や寄付金でアラチア山脈の一角ポコノのレハイ河

に沿ったホワイト・ヘブンという土地二一五エーカーを購入することができた。

ホワイト・ヘブン 結核療養所

はじめ、山の東北側、中腹に小さな療養コテージ（小屋）と、台所、食堂、納屋と従業員の家を建て、定員四〇人の収容に当てた。一九〇一年八月のことである。まず一人の管理人とコックを依頼し、三人の志願患者を入所させた。実験にも等しい計画と危ぶむ人が多かった時代であった。結果は良好であった。その後、管理者の家と食堂、電力、ボイラーなどの他、上水や下水を整備、授産場として養鶏場も作った。五年後には近代的な病室をたてた。交通の便も良くなり、患者数は年間六〇〇人を超え、市内のジェフアールソン大学での入院患者の三倍になっていった。やがて、さらなる寄付金を得て、近代的なサナトリウムを建設できた。大學、研究所の有名な経験のある医師を無償で診療奉仕を依頼し、また研究成果も治療に反映させていた。看護学校をつくり療養専門の看護スタッフを養成し、米国屈指の結核療養所となった。後に有料の患者も収容したが、それでも資金集めに

は絶えず苦勞をしていた。

第六回の国際結核病学会がワシントンで開催されたときには、世界各地の学者がホワイトヘブン療養所を訪問し、その偉業を讃えた。時の大統領、テオドール・ルーズベルトは賞状と一〇〇〇ドルの賞金を贈って賞賛した。

一九〇一年から一九四一年まで二五、三三五名の患者を収容し、年間平均は六一七名であった。この療養所へ寄付された数多くの篤志家の名がぎざまれていた。鉄鋼王の一人ヘンリー・フィップスやジュ・ポン財団のピエール・ジュ・ポンもその中にある。

この療養所は一九四六年まで続けられ、結核患者の激減により閉鎖された。フリック医師は一九三八年、何の栄誉も受けることなくこの世を去った。医師、経営者、博愛者として傑出した人物であった。

（愛知県がんセンター・名古屋公衆医学研究所）